

農村開発実践のフィールドワーク - アクター・アプローチからの学び -

日本福祉大学大学院 非常勤講師
小國 和子¹

キーワード：アクター、介入、フィールドワーク、相互作用、東南アジア

1. はじめに

本報告では、長期的な参与観察やライフストーリーインタビューなどフィールドワークのエッセンスが農村開発援助においていかなる意味を持ち得るのか、東南アジアにおける具体的な事例を用いて検討する。

佐藤はフィールドワークの狭義のエッセンスとして「参与観察と密度の高い聞き取り」をあげ、広義にはサーベイ調査や資料分析などを含めた民族誌作成に向かうさまざまな作業をふくむものとして説明している(佐藤[2003:67])。長期にわたる参与観察と密度の濃い聞き取りは文化人類学の基本的な方法論だが、社会学者である佐藤に代表されるように、広義のフィールドワークは現在、社会科学において広く有効性が指摘されている。人類学のフィールドワークでは、地域の人々との信頼関係の構築をもとに対象社会に対する包括的な理解を深め、調査者として一定の距離をおきながら農村の社会文化的な文脈を浮き彫りにしようと試みてきた。しかしながら、長期にわたって対象社会の生活に参与し問いを発し続けるフィールドワークは明らかな「かかわり」であり介入である。特に開発現象に切り込むフィールドワークでは、問いを発することで、住民の意識を喚起することにもなる。住民が抱える問題に直面した時に「聞き手」であったはずの調査者自身がどう「語り」、「かかわる」のか、自らの姿勢が試される。本報告では、ロングのアクター・オリエンテッド・アプローチ(以降、アクター・アプローチ)を概念的な基盤として援用することで、「世界認識の方法でもある」と表されるような(佐藤[2003:31])、「かかわりの方法論」としてのフィールドワークに着目し(京大[2006:5-6])、開発援助における意義を問う。

他方、農村開発協力では、農村は貧困の巣窟と語られて生計向上が目指されてきた。現在では対象地域の固有性が重視され、対象農村の特徴にあった援助アプローチが模索されている。しかし「対象社会は問題状況にあり、それを軽減すべく介入する」という援助の大前提があり、援助側の有する資源によって問題発見の糸口も変わってくる。地域への深い理解自体が目的化される調査とは、調査者の姿勢や、データを読み解く関係者の視点が異なる。農村社会ではさまざまな日常的行為が相互作用の関係にあり、セクター別の「問題状況」の単純な足し算で考えられるものではない。

本報告では、社会固有の価値規範に寄り添い経験の共有から学ぶフィールドワークの基本的な特徴と、対象社会に対する介入性という二つの側面を、開発実践の一環として考察する。開発援助において受益者の自発性、持続発展性が求められ、援助する側の権力性が取りざたされる現在、援助の現場におけるフィールドワーク実践を通じて「かかわりとしての援助」を正面から捉えていく必要性を主張したい。

2. アクター・アプローチの視点

(1) プロセスへの着目

経験共有を重ねながら問いを投げかけることで、生活のあり方や将来への希望を住民自身が声に出し、考える機会を提供できるようなフィールドワークは、援助介入に通じる方法論として興味深い視点を提供できると報告者は考える。しかしそのためにはまず、フィールドワークを実施する調査者と地域住民との相互作用的な関係を読み解く視点を設定する必要がある。穂坂は、主体間の相互作用を通じて問題の構造が転換され、質的に新しい関係が生まれるような変化のプロセスこそが福祉社会開発の本質であると指摘する(穂坂 2005:149)。地域内外の主体が出会い、相互に影響を及ぼしつつ自らや周囲を変化させるプロセスとしてフィールドワークを捉えたときに、われわれはそこから何を見出せるのだろうか。

¹ [連絡先]：〒910-0026 福井県福井市光陽 2-7-5-502, e-mail: oguni.k@nifty.com.

本研究は日本福祉大学 21 世紀 COE プログラム「福祉社会開発の政策科学形成へのアジア拠点」の一環で行われている。

この問いに対する答えを模索する一つの手立てとして、ロングの提唱するアクター・アプローチの2点の特徴に着目してみよう。第一点は、それが内発 外発といった二項対立的な捉え方を乗り越え、複雑で多様な人間関係を射程における概念装置であること、第二点は、固定的な計画遂行型の事業で取り上げられなかった「ひと」の相互作用的なかわりのプロセスを分析対象とすることである。

ロングは、諸現象を生み出していく人々とかかわりに着目し、地域内外で社会的に位置づけられ事業や出来事を通じて関連づけられる様々な個人を、社会的行為者（以下、アクター）と呼ぶ（Long 1992）。ロングによると「アクターが交渉したり相互の生活世界に適應する過程で、存在する知識に相互作用的に修正や変化が加えられたり、新たな形が出現する」という（Long 1992:211-215）。地域開発政策では住民の主体的な参加の重要性が指摘されているが、実際にはより複雑な個人、集団の相互関係を通じて物事が進む。影響を及ぼす外部者と住民との関係も、与えるものと受けるもの、外部と内部という単純な見方ではなく、関係者の相互作用によって知識が生まれ経験が積まれるプロセスが重要性だと指摘されている²。

(2) 出来事を生み出し、変化を遂げるアクターたち

アクター概念で重要な点は能動性にあり、アクターは「問題を孕む状況を判断し、『適切な』反応を起こしていけるような知識と能力、エージェンシーを有する社会的な存在」と定義されている³（Long 2001:240）。わたしたちは誰も、現在までの経験を通じて培われた価値観をもとに物事を解釈、判断し行動する。そして自らの世界観をもとに他者の行為に対応し、はたらきかけ、影響を及ぼしあっている。

アクター・アプローチでは、マクロな外的環境に連動して「内発性の揺らぎ」を経験しながらも「内的な再構成力が外部性を導く」（Arce and Long 2000:13-18,191）と説明されるようなプロセスを考察する。アクターの軌跡を追うことで、社会の内部性を固定化せずにアクターの流動性と価値の変化を描くことに力点が置かれる。アクター間の関係を単純化する二項対立的な視点や、固定的な計画に依存する評価など、現在の開発援助が抱える問題を乗り越え、変わりゆくアクター間のかかわりを検討しようというのである。

(3) 概念装置としてのアクター・アプローチとフィールドワーク実践

ではアクター・アプローチは開発実務レベルで直接「役に立つ」のだろうか。同アプローチはいわば物事を見る目を育てる概念装置である。この見方を研ぎ澄ませることで、実務家は同一の言葉を巡るアクター間の認識の齟齬や、世界観の違いによる相互不信、誤解が現場で問題を生じさせるさまに注意深く対応できるだろう。より重要なことは、一方的な立場で他者を「理解」している自らの認識と行動の偏りに敏感になることである。アクター・アプローチは必ずしも実用的なツールではないが（小國 2003:65-70）、自らの行為と他者とのかわりを見直し、よりよい実務を遂行する上で重要な視点を提供してくれる。逆を言えば、特定アクター（例えば政策実行者）の利害に沿って一方的に展開する実務に都合よく「役立つ」ツールとは一線を画する。

以下では、アクター間の相互作用プロセスとして開発実践を捉えることで援助実践においていかなる示唆を得られるかという観点から、農村開発援助におけるフィールドワークの導入例を紹介する。参加型開発の重要性が叫ばれ、事業における住民参加はいまや当然となっている。しかしカンボジアの事例地域では、住民参加の名のもとに行政から住民への責任移行ばかりが進められ、住民から行政への不信が高まったり、行政が住民の「やる気のなさ」を嘆いたりしていた。理念的な参加型開発を目指す援助事業で求められるのは、住民だけを当事者として祭り上げるのではなく、周辺アクターの意識を喚起し、アクター間の連携を進めながら住民の意思決定を創出できるように、これまで以上に労を惜しまずデリケートに「かかわっていく」アクターとしての外部者アプローチである。以下の事例では、住民自らが様々なトライアルの機会を通じて活動を実施していくエントリー活動においてフィールドワークのエッセンスを取り入れることで、事業実施者など「周辺アクター」と住民との関係性の転換と、積極的な協働の促進を目指した。

3. 事例紹介：カンボジアにおけるフィールドワークの導入とエントリー活動

² チェンバースは「下位の人」と「上位の人」が互いに認め合い、かわりあう相互作用のプロセスが学習の一部として重要であるとし、経験的に相互的な視点に基づく開発実践の実現を求めている（チェンバース 2000:515-519）。

³ エージェンシーとは「意図的かどうかにかかわらず、経験や希望を再帰的に解釈、インターナライズする知識能力や、技術を使いこなし、資源にアクセスできる能力」であり、「自分や他者の行動や思考に影響を与えたり、それらを促す行為を可能とする知識能力、能力、社会的な関係」としてロングは説明している（Long 2001:16-20,24,240）。

対象地域はカンボジア北西部の都市バタンバンから 20 km 程度の近郊に位置する農村で、2003 年から 3 年にわたって日本政府の技術協力プロジェクトが展開された⁴。事業目標は農業生産性の向上と農家生活の安定であり、報告者は「農民組織」担当として 2 年半派遣され、水利組合支援および女性を中心とする食品加工活動に携わった。これまでに報告者は、同事業における農民組織分野の取組みをレビューする中で、本来長期的な視点が求められる農村社会開発にむけて短期的な援助介入が取るべきアプローチのひとつとして事業を「学びの場の創出機会」として捉えることを提案し、その事例としてエントリー活動を紹介してきた⁵（小國 2006）。エントリー活動とは、住民にも実感がたい自らのポテンシャルや「やりたいこと、できること」としてのニーズを事業活動への参加を通じて経験的に探り、自発的かつ持続可能な活動を模索するプロセスである。カンボジアの例では、小規模で簡易な食品加工研修の会合を重ねながら、必要な技術を身につけたり、リーダーシップの発揮を促したり、グループが生まれて地域社会での役割を見出して行ったりという展開がみられた。本報告では、開発援助におけるフィールドワーク実践という主旨にそって改めて同活動の特徴を整理してみたい。

エントリー活動は、女性グループ活動の活性化の一環として行われた。エントリーという名前にあるように、一回限りで完結することが初期段階の原則だった。参加者は自らの意思で会合を計画し、もちよりで実習を行う。同時にその場が介入側にとっては聞き取りやアンケートなどフィールドワークの場となった。たとえばレシピの準備以上に「今回の会合で我々は何を知りたいのか。何を伝えたいのか。参加者に何を期待するのか」を明確にすることを重要視し、会合前の話し合いと後のレビューに優先的に時間を確保した。それまでの経験から、援助による研修を一方的に上位から下位へ与える場と捉えていた公務員にも、受動的な立場で物を教わるつもりでいた住民にも当初は困惑がみられた。しかしフィールドワーク活動を併せて行い、外部者の姿勢を徹底していく中で、援助側が「ただ教えるだけではない」立場で、技術は指導するが聞き取りでは「教えてもらう」という関係の構築をめざした。これは、報告者が人類学的なフィールドワーク経験を通じて身につけてきた姿勢と関係の作り方であり、それを「エントリー活動」という企画を通じて事業実施者である現地公務員と共有すべく指導を行ったわけである。

4. 「わたしたちが変わるプロセス」の理論的体系化の必要性

(1) ギブアンドテイクな援助実践

上記では、開発援助実務におけるフィールドワークの意義について、エントリー活動を例にとって検討した。エントリー活動は、それが「相手の変化を期待する」援助実践であるという点で、「他者理解」を目的化するフィールドワークとは大きく異なる。技術的な介入と調査を同時に進めることで、集中的な調査が対象者にかかるストレスや、一方的な情報の収奪といった問題をのりこえることができたのは確かだが、このような両面を有する事業は、介入効果を評価する上では容易ではない。その理由のひとつは、現在の事業評価が「対象地域、対象者の変化」を測るものであり、相互学習的なプロセスに意味をもたせることが難しいためである。カンボジアの事例でも、実際には多くの時間を割いていた「情報収集、関係づくり」といったフィールドワーク的な側面は副次的な特徴に過ぎず、あくまでも住民参加による技術獲得およびグループ育成を前面に出して活動を展開してきた。それは当時、正面から援助介入におけるフィールドワークのエッセンスの有効性を論ずる観点から、報告者自身にとっても明確ではなかったためである。これを改めて捉えなおすことで、その後続く良好な関係づくりを念頭に置いたよりギブアンドテイクな援助実践アプローチへの示唆としたいというのが本報告の意図である。

(2) アクターによるフィールドワークで研究と実務をつなぐ

エントリー活動ではフィールドワークを取り入れることで、報告者を含む事業実施者が常に援助者としての一時的な立場に甘んじず、自らの外部性を意識し、対象住民から学ぶ姿勢を確保していく上で有効であったと考える。では、アクター・アプローチに基づくフィールドワークは、学究的関心からフィールドワークを行う調査者にとっていかなる学びを提供できるのだろうか。再びロングの考察に立ち戻ってみる。

⁴ 報告者の研究関心にそって事業の一部を取り上げており、事業全体を論ずる主旨はない。全ての発言は報告者個人の責任に帰する。報告の大部分は公表済（小國[2004, 2005ab]）だが、一部に新しい議論を含むため仮名扱いとし、対象地の地理的詳細は割愛する。

⁵ 事業説明および直接的な活動についての詳細は拙稿（小國[2004, 2005ab, 2006]）を参照のこと。

ロングはアクター間の相互作用プロセスを丁寧に記述していく重要性を指摘しながらも、「アクターとしての調査者」をいかに論述するかについては言及を避けてきているように感じられる。ロングがその点に無関心というわけではない。「調査介入は(政策介入ほど)物質的、政治的資源をコントロールするわけではない。しかし外部者としてローカルアクターから与えられる役割から逃れられるわけではない」とし、調査者がアクターであり相互作用のなかかわりの一環で調査が行われることに言及している。

しかしロングの事例考察において、他者に問いかけて語りを引き出しているはずの調査者に対する考察は殆ど含まれていない。この点において、わたしたちはロングの「エージェンシーを持つアクターの相互作用を通じて現象が生み出される」という考え方を支持しつつも、「いかにわたしたち自身を含めて語るか」という課題を自ら乗り越えていくしかない。アクター・アプローチに従えば、調査者は明らかにアクターの一人であり、調査を通じて自らと他者に変化を生じさせる。研究と実務の乖離を減じ、研究から実務へのフィードバックが求められる中で、「変化因子としての調査者」をいかに位置づけられるのだろうか。

重要なのは、「調査アクター」の概念的な位置づけである。調査技術を身につけた実務家が調査を実践できても、それがあつ一方的な立場に立脚し、その世界観の限定性が議論の対象にならないような調査は、ここで想定しているアクター・アプローチに基づく調査研究とはいえない。「ありのままの他者理解を深める」と同時に、「他者を学ぶことでアクターとしての自らを意識する」ことが重要である。自らもアクターだという認識をもとに、社会実践の一環としての調査のあり方が検討されるべきだろう。

関係者による調査研究は客観性に欠けると批判され、調査上のバイアスとして自省されてきた。援助事業の事前調査も多くの場合、客観性を確保して癒着を防ぐために、事業関係者から切り離されてきた。また上記で紹介したカンボジア事例は、いわゆるアクション・リサーチとしても捉えられるが、アクション・リサーチも「研究者が実践活動に深くかかわりを持つこととなるため、中立的視点を失う危険性が高い」ことが常に問題となるという(草郷[2007:254,260])。しかし厳密に言えば、現地を訪問して問いを発する調査者はやはりアクターであり、完全なる無関係者ではない。そしてそれ自体が調査の質を貶めるのではない。問題は「アクターとしての自分」について認識が不十分なまま調査が遂行されることにある。

アクター・アプローチをもとに思考を転換し、調査研究が実務との協働をすすめていくための第一歩として、「援助実践につながる、調査する側の意図」を明確に持つこと、それを単なる調査上のバイアスとして捉えるのではなく、より積極的に「わたしたちが変わっていくプロセス」として考察対象に加えていくことを提案したい。これにより、調査者は介入者としての権威に対する自省と、展開する援助事業への責任をとともに背負うことになる。援助事業における負の影響に敏感になり、正の介入効果を積極的に評価していくために、アクターとしての調査研究者の事業への参加が促進されることを期待したい。今、地域社会開発の現場では、人々の意識を喚起するファシリテーションの重要性がとりざたされ、住民の主体的な参加による人的資質の向上が目指されている。アクター・アプローチに基づくフィールドワークは、介入性の自覚と相互作用性への着眼という点で、実務家 調査者の双方をアクターとして関連付ける社会的実践に向けて新たな可能性を拓くものになるのではないだろうか。

【引用文献】

- チェンバース、ロバート[2000]『参加型開発と国際協力:変わるのはわたしたち』、野田直人他訳、明石書店(Chambers, Robert(1997), *Whose Reality Counts?*, London: Intermediate Technology Publications)
- 穂坂光彦[2005]「福祉社会開発学への方法論的考察」、日本福祉大学 COE 推進委員会編『福祉社会開発学の構築』、ミネルヴァ書房、128-176。
- 草郷孝好[2007]「アクション・リサーチ」小泉潤二他編『実践的研究のすすめ:人間科学のリアリティ』、有斐閣。
- 京都大学大学院 AA 研、京都大学東南アジア研究所編集(文中引用では「京大」と略記)[2006]『京大式フィールドワーク入門』NTT 出版。
- Long, Norman [2001]『*Development Sociology: Actor Perspectives*』, London and New York: Routledge.
- Long, Norman and Ann Long (eds). [1992] *Battlefields of Knowledge: The Interlocking of Theory and Practice in Social Research and Development*, London and New York: Routledge.
- Long, Norman and Arce, Alberto (eds) [2000] *Anthropology, Development and Modernities: Exploring Discourses, Counter-Tendencies and Violence*, London and New York: Routledge.
- 小國和子[2003]『村落開発支援は誰のためか』、明石書店。[2004]「“根っこ”のある組織化を目指して」、佐藤寛編『援助と住民組織化』、アジア経済研究所。[2005a]「村落開発援助におけるエンパワメントと外部者のまなび」、佐藤寛編『援助とエンパワメント』、アジア経済研究所。[2005b]「農村生活と開発」、青山温子・佐藤寛編『シリーズ国際開発第3巻:生活と開発』、日本評論社。[2006]「農村社会の『よりよい生活』に向かう援助とは カンボジアにおけるエントリー活動の試み」、『第17回国際開発学会全国大会報告論文集』p148-151。
- 佐藤郁哉[2003]『フィールドワークの技法:問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社。